

曖昧な記憶

Vague Memories

1 | 作品の構造(写真と装置の関係)

本作品は、自分の記憶に残る「ある風景」の大切なイメージを損なうことなく、その風景を記憶に限りなく近い映像(写真)として定着させる為の装置です。iPhone などの撮影機材を床部分に設置し風景に向けて撮影することで、「BE KOBE」の文字を枠内に取り込みつつピンボケな写真*を撮影することができます。鉄骨造の柱と木造の屋根を有する建築に似せた「仮設物」です。

* 詳細は後述の3章を参照



2 | 作者の生い立ちと記憶

私は、1980年代初頭に神戸市須磨区のニュータウンに生まれ、小学校卒業までの時期を過ごした団地育ちです。上級生から下級生まで多くの子どもたちが同じ団地で生活していた時代で、ガキ大将的存在の兄貴分から弟分の下の世代まで、年齢を超えた集団となって公園での草野球や緑地での虫取りまで様々な遊びを経験しました。

人工島の造成のために山を切り開いた土地で緑や公園が多く、団地内の道も車がそれほど走っておらず、幼少期を過ごすにはとても恵まれた環境でした。環境が心理的安全性を生みこどもの遊びを促進させられたことが、様々な楽しい経験を得て良い記憶として定着した理由だと思います。小学校に通う通学路や、放課後や休日に遊んだ公園など、風景は出来事と共に覚えていてます。

ですがその後、中学入学を契機に引越しをして神戸を離れ、神戸の友人たちとは疎遠になっています。引越しを重ねて現在は神戸を離れて30年以上が経ちます。

3 | 郷土愛(非シビックプライド)とその解像度

ある日、数十年ぶりに郷里である団地を訪れる機会がありました。地下鉄の駅ホームを降りると懐かしい風景が広がりましたが、いく

つかの部分が記憶していた色と異なっていたり、エスカレーターだったと記憶していた場所は階段だったり、記憶との思い違いがいくつもありました。また、駅前の開発で低層の店舗群が商業ビルになるなど風景の劇的な変化もあり、これまで温めてきた記憶を書き換えられる経験をしました。

郷里である神戸への想いは強く、今でも神戸が出身地であることに誇りを持っています。しかし、久しぶりに訪れた風景は、記憶の劣化や思い込み、開発行為による変化などにより、これまで温めてきた郷土のイメージとは少し異なるものとなっていました。

さて話は変わりますが、近年、都市の観光施策として「シビックプライド醸成」の企画をよく見かけるようになりました。シビックプライドとは「都市に対する市民の誇り」とされるもので、「抽象的な情動ではなく、その都市やコミュニティのもつ何らかのもの・こと・場所などを拠り所にする事が多く、近年の日本においては、深刻な人口減少や少子高齢化に伴って衰退する地方経済の活性化などに効果が期待できる」として、シビックプライドの醸成に取り組む自治体が増えている。(中略)郷土愛とは異なるもの。”とされています(出典・一部抜粋：Wikipedia)。自治体ではシビックプライドの概念をキャンペーンとして展開することも多く、都市の名称を大きな文字で象ったオブジェが撮影スポットになっているものがあるのが一般的です。神戸市では「BE KOBE」の文字をデザインとして用いられたオブジェが観光地の撮影スポットなどで見られます。

これらはシビックプライド醸成に向けた施策のため、前述の「都市に対する市民の誇り」にならば神戸市にお住まいの市民に向けたオブジェだと考えるのが字義的に自然な解釈ですが、実のところは「地方経済の活性化への寄与」がその目的であると想像され、主に来街者や観光客の方の記念撮影向けに作られていると考えるのが現実的な解釈だと思います。なぜなら、お住まいの市民の方にはそのようなオブジェは必要なく、私の記憶のように個々に大切な風景のイメージを持ち、オブジェを頼った記念撮影は不要だと考えられるからです(久しぶりに帰った娘と記念撮影する口実を求める父親などもあるとは思いますが)。

では、私のように郷里を離れたが今も想いを強く持っている人は、どのようにすれば郷里との記念撮影(記録)を通した結びつきを得る

ことが出来るでしょうか?「シビック=市民」が観光客だとするならば、離れた元市民はどのような立場で関わりを持つことが出来るでしょうか?これらの問いからは「風景と記録の関係」、つまり訪問者の立場による映像記録のあり方の違いが浮き彫りとなってきます。

そこで、郷里を離れた人(自分)が、「郷里への想いを表現することにはどのような方法があり得るか」「大切な記憶を上書きしない風景の記念撮影(記録)のできる方法とはどのようなものか」と考えたのが、この作品の創作の契機です。記憶を上書きされず記録できる方法として、「曖昧な記憶=解像度を下げた写真」を生み出せる装置を考案しました。

4 | 場所と記憶について(記録するなら曖昧にすべきもの)

私の郷里の記憶には、近所のガキ集団で怪談話をした団地の入口、幼馴染との登校時の柵に囲まれた待合せ場所、初めて自転車に乗れた公園など、記しきれないほど無数にあります。それらの風景の記憶には、舗装の欠けた部分や、柵の色まで含まれているなど視覚的にはかなり解像度が高い一方で、先の数十年ぶりの訪問では、建物が思ったより小さく見えたり、道幅が狭く感じたり、駅から当時の自宅までの距離が近く感じたりと、身体的な体感の相違がかなりありました。10歳の身長と大人では視線も違いますし、注視する視点(思考)も当時とは変化しているため当然のことだと思います。

そして、風景にiPhoneのカメラを向けた時に、この「記憶と異なる風景」を記録して良いものか懐疑的に感じたことが、前述の『「曖昧な記憶=解像度を下げた写真」を生み出すこと』の決定的な動機となりました。映像として記録するのであれば、記憶を妨げない程度の曖昧さで残すべきではないか、と。「美しくないまぜの記憶をそのまま残すためのピンボケ具合=夢で見るような水中の視界のような曖昧な世界」。この“程度”が年月を経た記録としては最適であると考えたのです。

なお、本作品は私が「第一の郷里」として大切にしている神戸を対象としたものですが、現在の私は、住む場所を転々とし、仕事を通して様々な地域と関わることも増え、その後「第二第三の郷里」として認識する土地がいくつかあります。それらの土地にも少ないながら大切にしている風景と記憶があり、本作品における神戸と同じく撮影の対象地とした展開を考えています。その際には「Vague Memories Project」として、これらの写真表現とサイトスペシフィックな装置**をセットで新規の意匠を考案する予定です。
**本作品は神戸に存在したとある建物をモチーフとしている

本作品の木材の産地は、六甲山脈の北側にある「裏六甲山」の民有林、上唐櫃の村の人工林です。上唐櫃地区の地域住民たちで構成するいわゆる“村の山”(民有林)で、かつては年1回の間伐も地域の住民たちがほぼボランティアで伐採を行っていた場所でした。

間伐を行っても木材市場に持っていくまでの余力はなく、市場に出したとしてもその人件費や燃料代で全く利益が出ないということで切り捨て間伐され続けてきた山。そこへ、本プロジェクトの協力者である方を中心に、「林業の存在しない六甲山の森の木をどうやって流通させ、森林として循環させていくことができるか」をテーマとした任意の活動団体が立ち上がります。そして地区の人たちが間伐した丸太を山で引き取り、3年でようやく様々な木製品や床材、壁材にできるようになったそうです。

本作品に使用した樹種は杉で、樹齢は約60年、等級は特に指定をされていません。品質を選別して販売する目的ではなく、手入れた材を全て使い、価値化することを目的とされているためです。際立った特徴は無いそうですが、六甲山が比較的寒いエリアにあること、花崗岩による地質のため成長が遅いことから、近隣の他地域とくらべ比較的目の詰まった良質な木材が取れるそうです。



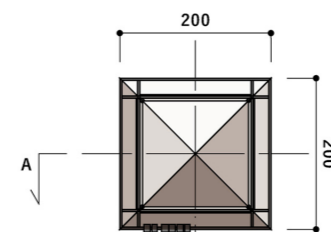
かつての六甲山は雑草や岩がゴロゴロしていた禿山のごとき有様だったと聞きます。先人が開墾し、植林や砂防を行った山の資源としての木材。年輪を数えてみると約90年生程度の歴史ある木も存在するそうです。これらの貴重な資源を、現代の有志が新たに循環の仕組みとして蘇らせ、神戸の地を離れた私の元に届くことに縁を感じざるを得ません。



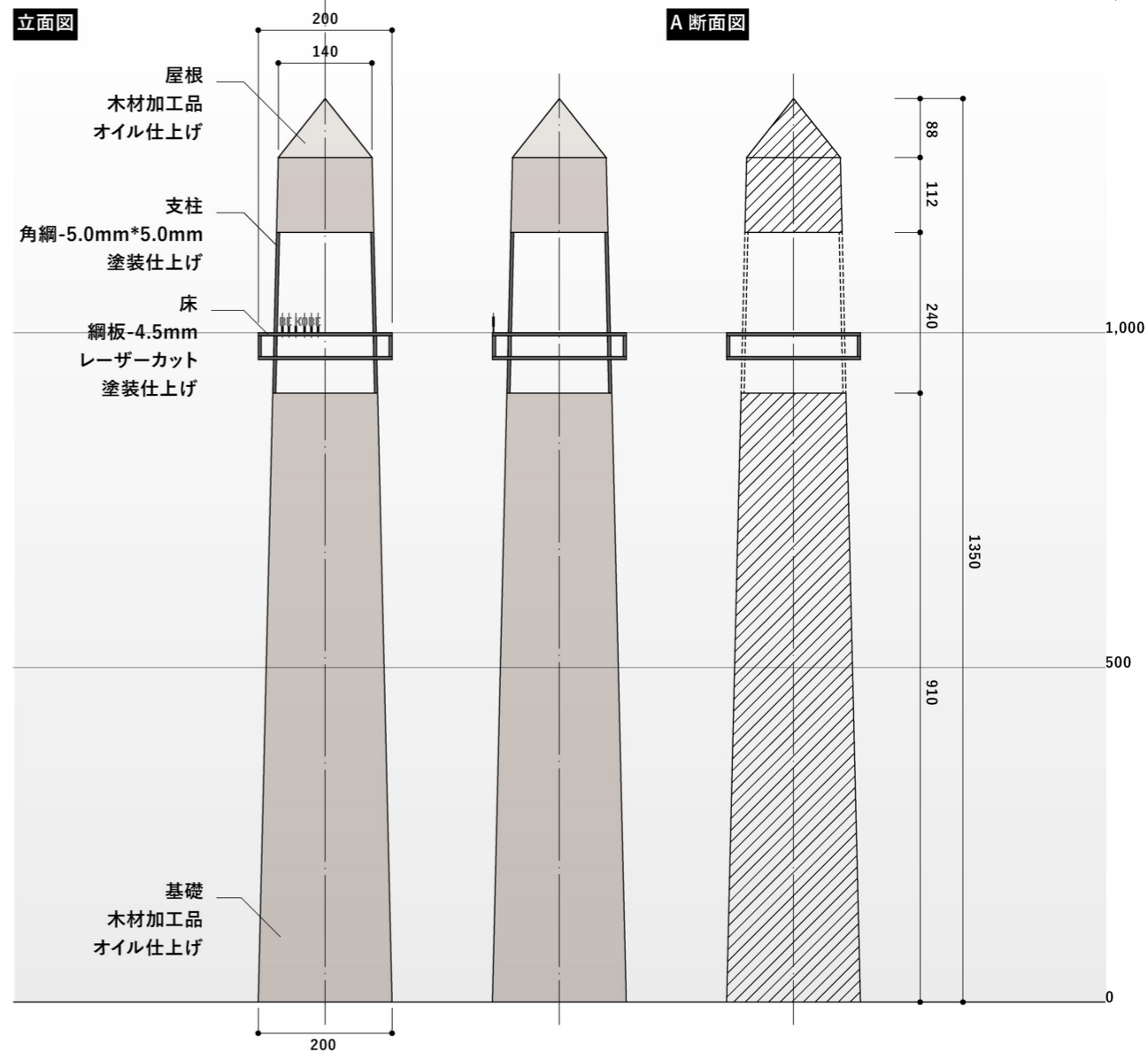
配置図

本作品は「仮設物」であり、写真撮影用の「装置」であるため、固定した配置場所を持ちません。そのため、神戸市須磨区横尾団地周辺の複数の撮影場所*を配置場所として記します。
* 撮影場所の写真は「写真集」を参照

平面図



立面図



基礎と屋根を木造、床と柱を鉄骨造としたハイブリッドの構造です。外形はオペリスクを由来としかつて神戸に建っていたある建築物をモチーフとしています。
通常より硬質な杉材を用いることで 0.1mm の加工精度を実現し、鉄の支柱との段差の無い接合を可能としました。
床部分に iPhone を設置し風景を撮影することができます。
床の端部には「BE KOBE」の切文字を配し、撮影時に枠内に取り込むことで、ピンボケの効果**を得る仕掛けとしています。
なお、仮設物のため可搬で土地へは定着していません。
** 設計趣旨の1章を参照